

## 〈書評〉橋本稔『小林秀雄批判』を読んで

鈴木, 清

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

132

(終了ページ / End Page)

136

(発行年 / Year)

1981-02-04

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019312>

## 橋本稔『小林秀雄批判』を読んで

鈴木清

ここにまた、「小林伝説」が新たに付け加えられることになった、しかも、あんまり小林秀雄が喜びそうにもない数多くのそれらが今ひとつ——と、率直なところこんな感想がまっ先に出て来そうな本ではある。

確か著者の橋本氏とは一度だけ言葉を交わした事がある。もう六、七年前のことになるが、当時学部の三年生だった私は、橋本ゼミナルの「特別ゼミ」とか称するものに伝手を頼りにひょっこりもぐり込んだのである。それは小林秀雄とドストエフスキーをめぐるの、「地下生活者の手記」の読書会のようなものであり、土曜日の昼さがりの喫茶店を使って開かれたのであった。

そこで氏が具体的に何を話されたかは、もう詳らかにしない。が、その時、資格を欠いた不躰けなる闖入者のような私の、二、三の質疑にも意を尽さんとして、こたわりなく応えてくれた姿だけは

今でも憶えている、ついでに、大変もの静かで忠実な使徒のごとき表情の十数名の取り巻きゼミ生たちの様子をも。

さて、私が何故このような個人的な懐古から始めたのかを訝る人たちもいるだろうか。それは他でもない、氏がこの度、本書を刊行すると知って私には、醒めた或る哀しい予感が走り、読み終えてみて、それが名状しがたい現実の結果となっていたことを、まず示しておきたかったからなのである。小林秀雄という男を、かくも単純に、これほどつまらなくちっほけなものに把えてしまうのだろうか。一体、それでどこが面白いと言うのだろうか——。

あとがきに拠れば、本書は講義用ノートめいたそれを再整理したものらしいが、これにあっばれ潔く「批判」と銘うった橋本氏の若々しい勇氣には正直なところ恐れ入る。仮にそれが試案・草稿の類いであろうとも、本人の意志でパブリッシュされた以上、ひとつの

見解と見做すのが普通であろう。そこで言うのだが、もしこれを読んで小林の総体がわかったと思う人間（もちろん自分の頭で小林を読んだことのある人間）があったなら、そいつは明らかに文盲である。

具体的に少し見てゆこうか。まず橋本氏は小林秀雄の表現史を五つの時期に分けている。

「第一期を過剰な自意識にからめとられていた時期。次いで物に即くことによって自意識の泥沼から脱出をはかった第二期」、「第三期は、逆に、物から離れて知の自立性に己れを賭ける。そして、もう一度逆転があつて、物に即き物のかたちに陶醉する第四期がくる」というのである。そして、ベルグソンをめぐる「感想」から以後の現在までを、

情から「もののははれ」へ——この季節を第五期と呼んではどうか。

としているのだが、まず私には、そうした腑分け作業がひとりの表現者を正確に識る上で、さまで有効でもなければ意味もないと思えるのである。もっとも、こうした理解の手がかりを必要とした氏の気持がわからなくもない。なぜなら、橋本氏も認めるように、本書の行間には小林から受けた影響——例外なく魅せられ翻弄された——の烈しさが滲みでており、それが小林秀雄という対象への認識・了解と批判・追究の、熟さぬままの混濁した格闘の跡となって歴

然たるからである。更に言うなら、それが通読後に浮かびあがって来る小林像の薄っぺらな他愛もなさ、新鮮味も緻密さもなくもどかしいばかりの評言の弱さといった、読みごたえの少ない原因になっているようだ。「批判」と言っても、これでは小林がビクともしまない。

ところで、およそ考え得る小林秀雄論のベストとは、必ず小林以上の文章が書けたものだけを指すのであろう。とすれば、本文の随所に見受けられる、氏の、まずなんとも軽みに至らぬくだけた口調をいかにするか。詳説するまでもなく、この意識的な操作は不毛であると言わねばならない。（参考までに小林の手になる同種の、一見似た構えの文章と較べてみるがいい、特に「あとがき」のしどけなさは誰の眼にも明らかはずだ。）

さて、本書の末尾に次のような一節がある。

小林秀雄とは、典型的な日本人であった。意識するしないにかかわらず、わたしの中にも、あなたの中にも、小林秀雄は住んでいる。この内なる小林秀雄を対象化して乗り越えること、それがわたしたちに課せられた課題だと思ふ。

いかにも、「この内なる小林秀雄」という果敢なまぶしい言葉は、いつでも美しい。だが、言われた方の小林自身にしてみれば実にかたはら痛かろう。換言するなら、橋本氏はそれほどに小林を内

部化しているのだろうか。はたして対象を内的に受けとめ、味わうように理解し、そこから近しく厳密に分析しては、毅然たる姿勢で批判し克服するというプロセスが、誰にも辿れるように形成されているか。例えば、氏が命綱よろしく握って放さぬ、くり返し語られる《物》化した小林の幻像とは（それ自体をめぐっては殆んど常識的な範囲でしか眺めず、深い考察はなされていないために、簡明ではあるが単純といえばあまりに単純な幻像であるのは否めないが）、その判断知見によって我々にどんな確実なチエを与え得、また対象の何が明らかにされていった事になるのであろう。一歩進めて、もし仮にそれが“自閉的”という断言を氏によって下されているものであるなら、逆に考えて、小林には“自閉的”になってまで守るべきものがあつたという事になりはしまいか。少なくともこうした疑問に直接真摯にこたえることは、本書には荷が重すぎよう。それこそ、否定が身を切る想いの徹底した内部化が図られていなければ、これは適わぬ業であるからである。（もっとも、そんな風にしなれば守れぬものなど愚劣なものにすぎない、と言おうなら、それはまた、別の思想というものだ。）

以上、思いつくままに断片的な意見を述べてみたが、最後に夫子自身の言葉によって、私が一番言いたい事を指摘しておこうか。もちろん、その内実は、同じ小林秀雄を批評の対象にすえる者として、不断に注意すべき基本的な自戒という意味を持っているからで

ある。その事が確認されるならば、たとえ本書の、漱石、芥川、太宰、サルトル、カフカ等への脱線部分が、ことごとくつまらないことなど、なんで意に介する必要があるだろうか。

対象の中深く分け入って、そのものを生々しく追体験するのは、奴隸の思想どころか、対象の真を把握し、対象を所有するためのすぐれた方法といふべきだ。ただし、この方法、中途半端だと、逆に対象に所有され、対象の中に己れを失うことになる。

（本書 P 20）

〈付記〉

『小林秀雄批判』は一九八〇年六月、冬樹社刊。定価千三百円。

拙文は、書評の主目的である内容紹介の煩をあえて退け、ポイントをめぐり、いささか自由な感想を述べさせていただいた。

## 「学内ニュース」(一)

現在、日本文学専攻に所属している学生は修士課程、博士課程合わせて四十七名、しかし、その誰もが他の四十六名の顔を知っているわけではない。我々の研究活動の主眼は当然のことながら各個人に当てられていない。もちろん、その各個人はそれぞれのゼミに属しているし、大学院内外の研究会に属している。しかし、ここでは大学院の日文専攻というワケ付けに対する意識は稀薄である。いわば、そうした個人々の研究活動を保証する場として日本文学専攻というものがあると言えるのかもしれない。そうした立場に立ったうえで、日文科学生の中核機関としてあるのが専攻委員会である。従って、委員会の仕事というのは対外的な(大学院内の他の専攻に対して、或いは他の大学に対して、等々)場での日文科の立場を保持していくことであるの言うまでもないが、それと共に専攻内の横のつながりにも充分気を配られねばならないのである。というのも、先にも述べたように個々の研究活動というのはおのづと孤立的になりやすいのだが、しかし、その個々の研究活動において、他の院生の研究を垣間見ることは決してマイナスではなく、むしろ少なくとも同じ研究者としてお互いを認識し合うことには必ず意義があると考えるからだ。従って、専攻委員会としてはそうした場を提供することに積極的な態度で臨む必要があるのである。

そして、その大きな柱となっているのが専攻誌である。現在、

『日本文学論叢』という名称で年二回の割合で発行している。各号によって古典関係の論文が多くなったり、近現代のものに片寄ってしまったたりという事はあるが、総じて、専攻全体の研究活動が反映されるよう努めているつもりである。

また、昨年度から専攻委員会主催で年一回の公開シンポジウムを開くことにした。これは、各個人の研究により広い場所を与えると同時に、それを専攻全体に還元することによって日文科全員のそれぞれの問題意識にいろいろな方面から刺激を与えようというものがある。昨年度が「労働者文学の可能性」、本年度は「表現の『在・不在』をめぐって——詩・演劇・小説——」というタイトルで行なわれた。始めたばかりのことでもあり、これに関してはこれからの課題も多いであろうと考えている。

(文責・専攻委員長 岡崎)

## 「学内ニュース」(二)

日文科学生委員会が当面の問題としているのは日文科各ゼミの相互交流です。交流が盛んに行なわれる事により、専門のみに囚われない、視野が広く深味のある研究が出来るものと思われまます。しかし、現状ではそれは容易ではなく、総体を把握する事は非常に困難であり、これからの重要な課題となっています。

現在の委員会の主要な活動内容は次の通りです。

○ゼミ論文集の刊行

○卒論目録の作成

○ゼミ数、選択分野等に関する学校側との交渉

○新三年生の為のゼミ紹介、及び登録準備

又、正規ゼミ以外の自主研究で現在明らかになっているのは次のものです。

○西田ゼミ

「大正文学ゼミナール」の名称でゼミ論文集の刊行

○正木ゼミ

OBの為の学習会、平家物語研究会、岩波古典文学大系を系統的に読破する会、春冬期に於ける専門外作品の集中的な学習会

○佐川ゼミ

英文の論文の原典講読及びその研究を行う言語学研究会

その他、ほとんどのゼミが夏期に短期間の合宿学習会を行なっています。又、一、二年生の間ではクラスを中心とする同人誌が刊行されているようですが、いずれも単発的であり、長期にわたるものではありません。

(文責・日文科学生委員会委員長 成川宣孝)